＜巻　頭　言＞

年頭のご挨拶

平　井　秀　輝*

令和８年の年頭にあたり，謹んで新年のご挨拶を申し上げます。皆様方におかれましては健やかに新年をお迎えのこととお喜び申し上げます。

さて昨年は，春先には乾燥による全国各地での山林火災，８月の九州各地での線状降水帯による豪雨被害をはじめとする全国各地での豪雨被害，また全国的な異常な酷暑や各地での渇水など，気候変動の影響と思われる極端な気象に振り回された年でした。特に夏場の渇水では，全国の27水系35河川で渇水調整協議会等の開催，取水制限等の渇水体制がとられ，ダムの枯渇が連日報道されるなど国民の関心が集まりました。宮城県の鳴子ダムでは６～８月期の総雨量が直近30ヶ年で最小を記録するほどの少雨となり，７月末には最低水位を下回り，出穂期に貯水率が０となる状態が連日続きました。ダム管理者と利水者が連携して，最低水位以下の貯留水を使用する緊急的な手段である異常渇水補給を実施し，かんがい用水を補給し続け，なんとか農業被害を最小化できました。改めて，「貯めモノ」たるダムの存在のありがたみを感じたところです。

このように，気候変動の影響による極端気象現象は水災害の激甚化・頻発化のみならず，渇水などの利水への影響，生態系など流域環境への影響といった広範囲に影響が及ぶところとなっています。かかる状況下，一昨年８月閣議決定された水循環基本計画の改定において「流域総合水管理」が提唱され，昨年６月には国土審議会及び社会資本整備審議会の合同により「流域総合水管理のあり方について」が答申されました。水に関する「流域治水：水災害による被害の最小化」，「水利用：水の恵みの最大化」，「流域環境：水でつながる豊かな環境の最大化」を実現するべく，取り組みの相乗効果の発現，利益相反の調整により，取り組み効果の最大化を図ることを施策の柱にしていくものです。ダムについては，その機能を賢く有効に活用していくことやそのための機能向上を図っていくことがさらに求められることになります。また，今後５年間で事業規模をおおむね20兆円強程度を目途とした第１次国土強靭化実施中期計画が昨年６月に閣議決定され，取り組みの予算面の裏付け

* 一般社団法人日本大ダム会議 会長
一般財団法人水源地環境センター 理事長，中央大学研究開発機構 客員教授，博士（工学）

が確保されたところです。気候変動が進んでいる現下，早急に国土の強靭化を進めるべく，ダムに関わる対策もこれまで以上にスピード感を持って取り組んでいかねばなりません。

次に，日本大ダム会議の最近の主な活動についてであります。日本大ダム会議では，我が国の優位技術たるダム再生技術を情報発信し，世界をリードする戦略の一環として日本のダム再生技術を国際戦略に結びつけるための分科会活動（「ダムの効用増大および流域環境向上のためのダム再開発事例分科会」2024年設置）を進めてきました。一昨年６月名古屋の「第12回東アジア地域ダム会議（EADC）」では，かかる取り組みについて話題提供し，その際，ダム構造やゲートなどの「ダムの安全（Dam **S**afety）」，降雨予測に基づく洪水・渇水管理や再生可能エネルギーなどの「運用の高度化（**S**mart use）」，貯水池土砂管理など「持続可能性（**S**ustainability）」の“３つの **S**（**3S**）”の重要性を提起しました。さらに，一昨年９月のインド・ニューデリーの ICOLD 年次例会におけるアジア地域会議（以下，APG 会議）にて，この“**3S**”に基づく日本の取り組みを紹介し，昨年５月の ICOLD 中国・成都大会における APG 会議では，「Dam Upgrading to be fit for future challenges」と題し，今後の活動方針をプレゼンし，アジア地域全体として協力いただくこととなりました。今後は，世界の共感を得る道を歩んでいくことになります。

また，成都大会では，「エネルギー転換及び気候変動への適応のためのダムと貯水池に関する成都宣言」が全会一致で採択されました。気候変動がもたらす課題とクリーンエネルギーへの転換におけるダムの役割とその重要性に関する宣言であります。その具体的方策として，宣言には「ダムアップグレードの重要性」と「統合的河川流域管理」が書き込まれ，我が国が進める「ダム再生」と「流域総合水管理」が世界の関心事になりつつあると思わせました。同じく成都大会では，成瀬ダム堤体打設工事で適用した自動化施工システムが ICOLD イノベーションアワード2025を受賞しました。本邦技術が今後の海外展開への弾みとなることが期待されます。

また，日本大ダム会議では，他国の大ダム会議との二国間会議を積極的に進め，技術協力関係を広げ深めているところです。昨年は，米国，アルバニア，韓国の大ダム会議との会合を開催しました。米国ダム協会（USSD）とは成都大会会期中での会合及び Dean Durkee USSD 前会長（ICOLD 名誉副総裁）の８月来日に合わせて会合を持ちました。両組織での取り組みを共有し，今後の継続的な技術交流を確認したところです。アルバニア大ダム会議とは，2023年に MOU を締結したところですが，昨年３月の訪日の際には，会合に加え WEB セミナーを行い，成都大会においても会合を持ったところです。アルバニアが現在抱えている課題には，技術継承，ダムのモニタリング・計測，堆砂モニタリングがあります。今後会員の皆様のお知恵を拝借しながら技術協力を図っていきたいと思いますのでよろしくお願いします。また，韓国大ダム会議とは成都大会において会議を行いました。来年2027年に韓国・

テジョンで開催されるICOLD第95回年次例会に対する協力依頼が議題でありました。一昨年のEADC名古屋においては韓国大ダム会議には多方面で多大な協力をいただいたところであり，来年のテジョン年次例会では本邦からの最大限の協力体制でお返ししたいと考えています。具体的な協力内容は今後韓国側と協議していくことになっていますが，何卒ご協力の程お願いします。

本年はICOLD第94回年次例会が5月23～28日にメキシコ・グアダラハラで開催されます。国際シンポジウムでは「水，エネルギー，そして社会：変わりゆく世界におけるダムの進化する役割（Water, Energy, and Society: The Evolving Role of Dams in a Changing World）」のテーマの下，多くの技術セッション，全体会議，若手技術者フォーラム，さらには最新技術を用いたコンクリート表面遮水壁型ロックフィルダムのテクニカルツアーなどが予定されています。メキシコは世界第10位の約1,000基（日本は第4位の約3,000基）の大ダムを有しています。例会会議への参加のほか，テクニカルツアーにも是非参加いただきたいと思います。また，今回のメキシコ年次例会と同時期の5月4～7日には隣国である米国テキサス州オースチンにおいて，本年のUSSD年次大会が開催されます。会員の皆様におかれてはICOLD年次例会と合わせ，参加をご検討してみてはいかがでしょうか。

最後に，ICOLDアジア・太平洋地域選出の角哲也副総裁の任期が本年に満了となります。2023年にご就任以来，EADC名古屋の成功，上述の“**3S**”の提唱と世界への展開活動など，多方面で精力的にご活動いただき，日本のICOLDでのステータスを格段に押上げていただいているところです。会員一同で残りの任期もしっかりと支援し，お支えしていきたいと思いますので，ご協力をお願い致します。

これからも永きにわたり本会議へのご支援，ご鞭撻を賜りますようよろしくお願い申し上げ，年頭のご挨拶とさせていただきます。